

## 人間・労働疎外の問題と適正技術

貧困・格差の問題、環境・資源の問題とともに、人間疎外・労働疎外の問題は、今日の科学技術文明がもたらしている、社会の根幹にかかわる問題であり、これらの三つの問題群は、互いに密接に連動している。しかるに、今日、前二者(貧困・格差、環境・資源)の問題にはよく注意が向けられるものの、人間・労働疎外の問題には光が当てられなくなっている。そのこと自体が、現代社会のひとつの特性をなし、前二者の問題も含めた今日の世界の問題の解決を困難にしていると考えられる。

### 1.人間・労働疎外とそれをもたらす要因

#### (1)マルクスの疎外論から

疎外の問題については、マルクスが『経済学・哲学草稿』において、次の四重の疎外を提示したことがよく知られている。(K.Marx: *Okonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahre, 1844*, 『経済学・哲学草稿』、城塚登・田中吉六訳、岩波文庫、1964)

##### 1) (人間の) 労働の生産物からの疎外

労働による生産物は、労働の(成果であり)対象化である。ところが生産物は労働者のものではなく(対象の喪失)また、労働者がそれに隷属するものとしてあらわれる。

##### 2) 労働からの自己疎外

生産行為が、労働者に属していない、疎遠な活動としてあらわれる。(単に賃金を得る等の外的な目的のためにしかたなくする労働になってしまう)

##### 3) 類的存在からの疎外

人間は自然の一部であり、自由な意思をもって、意識的な生命・生産活動を行う存在であるのに対し、その活動が、単に彼の生存(肉体的欲求充足)のための手段と化してしまう。(「共同的なあり方からの疎外」と解説されることもある)

##### 4) (他の)人間からの疎外

人間が、自分の労働やその生産物から疎外されているということは、他の人間や他の人間の労働および労働の対象からも疎外されていることを意味する。

しかし、この疎外論が、そのような疎外が何に由来して生じてくるのかを明らかにしていないのに対し、それに続く『ドイツイデオロギー』では根本的な視座の展開が見られ、これらの疎外(の一部)が「自然発生的な分業の体系」の帰結としてとらえられるようになる。すなわち、いきなり、疎外や、対象(生産物など)の物象化が生じるのではなく、まず、社会における人間の関係性の特定の形態があつて、それに由来して、疎外や物象化が生じてくる、と

いう把握である。(真木悠介『現代社会の存立構造』、筑摩書房、1977を参考にした)

真木悠介は、その関係性の特定形態から疎外や物象化が生じてくるという論理を支持しつつ、上記の四重の疎外の提示は、順番が逆転しており、(3)と(4)は、商品—貨幣関係の水準で生じる疎外であるのに対し、(1)と(2)は、より高次の資本—賃労働関係の水準において、商品化された労働力の使用過程としての労働の特質として生じる疎外であるとしている。

より簡単な定義としては、広辞苑では「疎外」を(マルクスによるものとして)「人間が、自己の作り出したもの(生産物・制度など)によって支配される状況、さらに、人間が生活のための仕事に充足を見出せず、人間関係が主として利害打算の関係と化し、人間性を喪失しつつある状況」としている。また、Wikipediaでは、「人間が作った物(機械・商品・貨幣・制度など)が人間自身から離れ、逆に人間を支配するような疎遠な力として現れること。またそれによって、人間があるべき自己の本質を失う状態をいう。」としている。

ただ、重要なことは、単に疎外を定義することではなく、一般に疎外という言葉で論じられる問題群がどのようなものであり、それはどのような社会の構造や要因の中で生じ、それらの問題を克服するためにはどうすればよいかを考えることである。そういう意味で、逆に「疎外されていない労働」、「疎外されていない人間」のほうから考えていくとわかりやすいと思われる。

人間の労働というものは本来、

- ・人間とその社会に必要とされるものを生産する。
- ・働く中で、人間がその力を発揮する。(それ自体が面白い)
- ・働く中で、人間がその能力を伸ばしていく。
- ・他者の役に立つ(よろこび)。
- ・人間として新たなものを創造する(よろこび)。
- ・労働の過程で、他者と交流し、協力的な関係を構築する。

など、人間の多次元的重層的な欲求を充たす行為でありうる。その前提には、人間が自由に仕事を選び、自分の意思で働くということがある。すなわち、自分の意思でやりたい仕事を選び、その仕事自体がおもしろく、その中で自分の能力が伸ばされ、創造性を発揮して自己実現し、仕事が社会の役に立つことがうれしく、また人間関係も広がっていく、といったような働き方がありうるし、それが本来のものであるともいえる。

それが、疎外された労働においては、本当はやりたくないのだけれども、賃金を得るためにいやいや働き、それで得られる収入も不十分で、仕事は決められたことをやるだけでおもしろくないし、それをやったからといって自分の力が伸びるわけでもなく、仕事が社会に役に立っているのかどうかもわからないし(あるいは本当はよくないものだとわかっている)、人間関係が広がるわけでもない、といったことになる。

このような疎外された労働におおわれている社会は、そこに生きる人たちの生きることの意義そのものを貧しくし、また社会全体が硬直して輝きを失ったものになる。貧困の問題や環境の問題は、人間が自由に充たされた生き方をしていくための基盤になる

ものであるが、疎外の問題は、その基盤にもとづいて実現されるべき、生の内実自体を喪失させてしまう。

## (2)マンフォード『機械の神話』から

疎外の問題を、人間と技術や機械の関係において、人類史的視野で展開したものとして、ルイス・マンフォードの『機械の神話』全二巻がある<sup>(※)</sup>。

(※) Lewis Mumford, “The Myth of the Machine Volume One: Technics & Human Development”, Harcourt, Brace & World, 1967 (『機械の神話—技術と人類の発達』樋口清訳、河出書房新社、1971)、“The Myth of the Machine Volume Two: The Pentagon of Power”, A Harvest/HBJ Book, 1970 (『権力のペンタゴン』生田勉・木原武一訳、河出書房新社、1973)

この著作で、マンフォードが主題的に取り扱っている、メガマシン(Megamachine)という概念がある。明確な定義はなされていないが、文脈から読み取っていくと、それは王権のような強大な権威によって支配される大規模なシステムであり、古代のメガマシンにおいては、それを構成する主たる要素は人力であって、生産物や生産方法に関する厳密な標準化と設計がなされ、人々はシステムの中の細分化された労働の一部を受け持ち、絶対服従的にその役割を遂行することによって、目的が遂行されるもの、といえる。メガマシンの具体例としては、ピラミッド建築の例が頻繁に引かれているが、灌漑設備、道路、神殿建設なども該当するのだろう。

そのようなメガマシンが、近代において、資本主義と近代科学技術の下で復活した、というのが、マンフォードの着想である。メガマシンと対照をなすものとして、新石器時代から中世後期(13~15世紀)にいたる間蓄積されていた「ポリテクニク」<sup>(※)</sup>をあげ、その技術にかかわる労働においては、人間の側が主体であり、技術はコントロール可能であり、さまざまな創意とくふうが生かされ、人間のペースで仕事が行われていたとする。そのような労働においては、人間的な能力が醸成され、労働の中によるこびがあり、仕事を通じての人間関係も形成されていく。ところが、16世紀以降、機械化・自動化が進み、生産組織の規模も大きくなると、人間は、単にその巨大なシステムの中のひとつの歯車となり、技術・装置・組織等の外的なものへの依存性が高まる一方、生産を支配する権力体系は強大化する。そのような状況の中では、労働は単に賃金を得るための手段となり、その労働により人間が成長すること少なく、喜びを感じることもなくなる。生産性が上がれば労働時間が減るかという、そうはならず、一部の労働者が追い出され、残った労働者はより単純な労働に長時間従事することになりかねない。利潤の増大~経済の拡大の希求に歯止めがかからない、とされる。

(※)ポリテクニクの例としてあげられているのは次のようなものである。(新石器時代)農耕、灌漑、鋤、織機、轆轤、甕、籠、調理、保存、醸造、捺染、洗濯、石鹼;(古代~中世)水車、風車;(11C以降、ヨーロッパに外部から流入)モザイク・タイルと織物、灌漑法、化学製品、

馬の飼育、タイル、絨毯、ゴシック構造、丸天井、木版印刷、磁器、絹、紙;(12C~16C)眼鏡、望遠鏡、顕微鏡、印刷機、機械時計、羅針盤、火薬・大砲、三本マストの船、滑車、起重機、建築(カテドラル等)

マンフォードの論は、大きな方向性としては間違っていないと思うが、産業革命と化石燃料の消費が、近代科学技術の体系や産業のあり方・生活のあり方に与えたインパクトというものが軽視されている感は否めず、また、次に述べるように現場性に欠けるところがある。

### (3) 工場の現場から

上記のように、マンフォードが論じていることは大枠では正しいように思うが、やや図式的にすぎ、現場をふまえていない感がある。一方、中岡哲郎は、自ら企業の現場での仕事を体験し、また製鉄所、化学プラント、食品加工工場から病院の手術室や区役所まで、さまざまな現場に入り込み、そこで生じていること、関連する要素とその変化を動的に把握しながら、技術・組織と労働の問題を論じている。

かつて、工場にオートメーションを導入することの是非が議論されていた頃、それを肯定する側は、オートメーションは、人間をつまらない単純労働から解放し、もっと創造的な仕事に専念できるようにする、とした。一方、それに反対する側は、オートメーションは、人間の熟練を解体し、雇用を奪うと主張した。

それらに対し、中岡が、工場の現場で実際に生じたことの観察から引き出した結論は、オートメーションは、単純労働から人々を解放するのではなく、分業の再編をもたらし、新たな単純労働を生む一方で新たな熟練をも生み、技術や組織を支配するものと、それに従属するものとの格差を広げるものだったのである。つまり、オートメーション等により単純に熟練が解体するのではなく、旧来の熟練が解体する一方で新しい熟練が生成する。ただ、その新しい熟練というものは、概して機械への依存をより強めている。また分業の変化、組織の再編といったこともともなう場合が多い、とされている。([『工場の哲学』、平凡社選書、1971)

新しい技術を導入することは、それまで人間がもっていた熟練が機械に移行することであるが、中岡は、そのような熟練の機械への移行とともに、新しく生じる熟練をも等分に見ることによって、労働の変質に対する議論は十全なものになる、という立場である。

### (4) コンヴィヴィアリティのための道具

やはり、広い意味で人間・労働疎外の観点から、近代科学技術を根源的に批判した著作として、イリイチの『コンヴィヴィアリティのための道具』がある。「コンヴィヴィアリティ」は、渡辺京二/利佐の訳本では「自立共生」と訳されているが、栗原彬によると、イリイチが住むメキシコの村の市や共用地に見られる祝祭的な共生がベースとなっている用語だという。社会の産業化によって制約を受けたり、従属的になったりすることがない、自律的で生き生きとした共生を指すものであると思われる。(Ivan Illich, "Tools for Conviviality", Harper & Row, 1973, 『コンヴィヴィアリティのための道具』 渡辺京二・渡辺梨佐訳、日本

エディタースクール出版部、1989)

イリイチは、「道具」という言葉を、単なる物理的な形やメカニズムをもった道具や機械だけでなく、商品を製造する工場のような生産施設、「教育」、「健康」、「知識」等を生産するシステムを包摂的に示す言葉として使っている。そのような意味において、コンヴィヴィアアルな価値を体現する道具と、人々を操作し従属させる道具とを区別し、産業化が一定程度以上に進展すると、「分水嶺」(Watershed)を越えて、コンヴィヴィアアルな価値のための道具が失われ、操作的・抑圧的な道具が支配的になるとしている。具体的に、イリイチがそれぞれのカテゴリーに属する道具の例として上げているのは、次のようなものである。

[コンヴィヴィアアルに使用可能な道具]

手動の道具、電話、手紙、文字、自転車、市場、牛耕(用の牛、犁)

[操作的で人々を従属させやすい道具]

学校、病院、都市間高速輸送、ジェット機、テレビ

[いかなる場合も破壊的に作用する道具]

複車線の道路網、長距離でバンド周波帯の広い送信器、露天掘りの鉱山、義務制の学校制度等

上の分水嶺を越えてしまうことによってもたされる問題を、イリイチは、①生物学的退化(Biological Degradation)、②根源的独占(Radical Monopoly)、③計画化の過剰(Overprogramming)、④分極化(Polarization)、⑤廃用化(Obsolescence)、⑥欲求不満(Frustration)に整理している。中でも中核的論点をなすと考えられる「根源的独占」という概念は、商品や商業的サービスが、それ以外の選択をするのを許さないような形で消費者を支配することを意味している。車が、遠距離を高速道路で通行するような都市環境をつくってしまうため、徒歩や自転車で通行することができなくなってしまう、学校が、学ぶことを教育と定義し直し、学校の外で学ぶ人には「無教育」という烙印を捺してしまう、現代の医療が、医師によって与えられる以外の看護を受ける機会を奪うなどの例があげられている。

イリイチは、このような産業化された社会の問題を乗り越えていくための方策を、必ずしも十分に論じてはいない。彼の議論からは、輸送機関の速度制限、産児制限等、産業化の進展あるいは人口増大に一定の制限をかけつつ、人々にコンヴィヴィアアルな生活がいかに望ましいものであるかを理解させ、そのような生活に満足する方向に社会を動かしていく、と主張しているように見える。そこでは「制約を設ける」ということが鍵となっている。

このように、人間・労働疎外の問題の緩和・解決は、今後の望ましい世界のあり方に決定的に重要な位置を占めるものであるが、今日、それが表だって論じられる機会はまれである。その背景には、80年代末の冷戦構造の終結により資本主義のヘゲモニーが増大し、資本主義的経済システムにおける賃労働が、自明のものとして問われることがなくなったことがあると考えられる。

## 2.人間・労働疎外をもたらさない技術のあり方

それでは、人間・労働疎外をもたらさないような社会のあり方、そこにおける技術のあり方とはどのようなものであろうか。ここでは以下の三点をあげたい。

### (1) 非商品的生産・労働の世界の評価と拡大

私たちは、今日ほとんどの生産や労働が、資本主義的な経済システムにおける商品生産のために行われているように考えがちであるが、実はそうではない。家事、子育て、介護はいうにおよばず、さまざまなボランティア活動、社会的活動は、それにとらわれていないし、また、企業などにおける賃労働も、実は、単に給与のためというよりも、その仕事がいがある、おもしろかったり、技術が身についたり、仕事を通じて人間関係が広がったり、という面を、一定の割合で含んでいると思われる。そのような非商品的生産・労働や、その要素が、正しく評価され、しかるべき支持・支援を得て拡大していくことが基本的に重要である。(会社員も、仕事を、自分が本当にやりたいことに近づけていくべきである)

### (2) 人々に制御可能な技術を

生産の場、あるいは消費の場に何等かの技術が導入されることは、基本的には、それまで人間の力能や熟練に属していたことが、道具・機械・設備・システム等の側に移行すること、あるいは増幅されることである。それは、多くの場合、何らかの効用・利便性や効率性の向上をもたらす一方、人間の、それらの外的なものへの従属性を増し、人間の関与を少なくする。それは単純に熟練が失われることではなく、新しい熟練(+新しい単純労働)が生成することでもあるが、その新しい熟練は、それ以前よりも、人間にとって対象的なものへの依存性を高めている。それらを総合的に考えて最適な技術選択がなされるべきであるが、労働の豊かさというものは、人間が自らの自由な意思と主体性をもって働くことから得られるものであるから、人々がそれに従属するのではなく、主体的に制御することのできる技術が優先されるべきである。

### (3) 人間的能力を引き出し、伸ばしていく技術を

人間が、仕事の中で、自らの力を存分に発揮し、人間としての能力を伸ばしていくことは、働くことの意義や価値の、重要で不可欠な内実をなしている。それにより、創造のよるこびや、他者と交流・協力していくよるこびも生まれてくる。そのように、人間の能力を引き出し、それを伸ばしていくような技術を重視すべきである。

以 上(田中直)